

グローバル化と地方創生を 一体的に捉えた教育で、 地域の課題解決を図る人材を育む

福井大学 ● 国際地域学部

2016年4月、福井大学に新設された国際地域学部は、国際と地域を別々のものではなく一体として捉えて、地方創生を担う人材の育成を目指している。その教育を実現するために、学内の資源を有効に取り入れたカリキュラムを構築。世界と地域をつなぐための英語4技能の育成、企業・自治体などと連携して行うプロジェクト型の演習科目、そして、課題に複合的にアプローチするための文理融合型教育と、学生が「国際」と「地域」の両面を深く学べる場を設けている。

国際と地域の両方に比重を置いて学ぶ

「グローバル化」と「地方創生」——この両者は一見、相反するもののように思えるが、実は切り離しがたく結びついている。経済の活性化、環境問題、多文化共生など、グローバル化した社会が抱える課題の多くは、地域・国内・国際という異なるレベルであっても共通し、相互にかかわりながら展開している。

このように、国際と地域を一体的に捉えて、地域の諸問題の解決を担う人材の育成を目指しているのが、2016年4月、福井大学に新設された国際地域学部だ。国際地域学部長の寺岡英男副学長は、学部新設のねらいを次のように説明する。

「福井県は、ものづくりが盛んで、中小企業の多い地域です。古くはオイルショック、近年ではリーマン・ショックの際には、県内の経済も大打撃を受けました。しかし、各企業は、新素材の開発や販売経路の開拓などに努め、海外にも進出し、今や世界シェア1位の商品も数多くあります。地方創生において、グローバルな視



福井大学副学長（国際担当）
国際地域学部長
寺岡英男 たらおか・ひでお

福井大学理事（教育・学生）等を経て現職。専門は教育方法学。



福井大学
国際地域学部教授
伊藤 勇 いとう・いさむ
福井大学教育学部教授等を経て現職。専門は社会学。

点は欠かせず、それは経済に限ったことではありません。地域の抱える諸問題を構造的・重層的に捉えて、地域にとって最善の課題解決策とそれを担う人材育成を、国際水準の教育で実現することを目指しています」

同学部では、国際と地域の両方に比重を置いて学修と研究を進めるため、学生全員に海外留学レベルの英語力をつけさせることを目指している。また、企業や自治体などと連携して行うプロジェクト型の学習を、4年間を通して行うカリキュラムとした。さらに、学生が主体的に学びを進められるよう、地域創生の視点から学びに入る「地域創生アプローチ」と、グローバルな視点から学び

に入る「グローバルアプローチ」の2つのアプローチを用意し、学生が自身の関心に応じて科目を系統的に学べるようにした。国際地域学部の伊藤勇教授は次のように語る。

「教育目標の達成に向けて、学問の枠組みを超えたカリキュラムにしています。アプローチは2年次進級時に選択しますが、3年次以降での変更を妨げない柔軟なものです」

1年次前期に英語科目を集中、英語で学ぶ力を育成

同学部の学びの特徴を見ていこう。まず挙げたいのは、3年次に半年以上の海外留学を必修、または推奨とし（アプローチによって異なる）、それに向けた英語力をつけるために、1年次に英語の科目を集中して履修するカリキュラムとしていることだ。

リキュラムを構築。遮音設備の整った個人の語学演習室を設置するなど、英語学習のための環境も充実させ、英語4技能をバランスよく育成するための英語教育改革を推進してきた。同学部では、それらのノウハウを土台として、学部独自の英語教育を行っている。1年次前期の履修科目は、約6割が英語関連の科目となる（図1）。同学部では、2つのセメスター制と4つのクォーター制を併用しており、反復学習が重要となる英語関連の科目は、クォーター制として、短期に授業時数を多く設定して集中的に学べるようにした。国際地域学部1年の相原光貴さんは、1年生の前期を次のように振り返る。



相原光貴 あいはら・こうき
福井大学 国際地域学部国際地域学科1年
県・私立海星高校卒業。



遠藤優海 えんどう・ゆうみ
福井大学 国際地域学部国際地域学科1年
グローバルアプローチ志望。宮城県宮城第一高校卒業。

「英語の授業が1日2〜3コマある日が週4日あり、さらに、1週間に

2回は課題が出るなど、毎日、英語を学習していました」

どの科目も、学生の英語力によって3クラスに分かれ、授業は原則、ネイティブ・スピーカーが担当し、英語で進められる。国際地域学部1年の遠藤優海さんは、英語の授業は楽しいと話す。

「スピーキングの授業はもちろん、ライティングやリーディングの授業でも、英語でディスカッションする機会が多くあります。授業は活動中心で楽しく取り組みますし、スピー

キングの力が大学入学時に比べて格段に上がりました」

同学部では、英語力の目標を、1年次前期修了時にTOEFL480以上、後期修了時に500以上と設定し、最終的には留学資格のTOEFL530以上、目標550以上としている。

「1年生前期修了時に受験したTOEFLでは、大半の学生が前期の目標を達成していました。集中して英語を学ぶことは、大きな効果があったと捉えています」（寺岡副学長）

図1 1年次の履修科目例

前期		後期	
1クォーター	2クォーター	3クォーター	4クォーター
大学教育入門セミナー		国際地域概論	
情報処理基礎		統計入門	
英語I	英語V	English Reading	English Reading
英語II	英語VI	English Writing	English Writing
英語III	英語VII	法学概論	
英語IV	英語VIII	政治学概論	
	TOEFL 対策講座	経済理論	
リサーチ入門		弁論法	
スピーキングI		異文化コミュニケーション	
ジェンダー論		課題探求プロジェクト基礎A	課題探求プロジェクト基礎B

赤い網かけの箇所は英語、グレーの網かけの箇所は調査・統計に必要な科目を示す。1年生の前期は、履修科目の約6割が英語科目となり、集中的に英語を学ぶようにしている。

*同大学の資料を基に編集部で作成



写真1 英語の授業は、英語教育のプロである英語インストラクターが担当。話す機会を多く設けて、コミュニケーション能力を高めていく。

*1 Teaching English to Speakers of Other Languagesの略。英語を母国語としない人に指導するために、第二言語習得理論、語彙・文法・発音などの教授法、カリキュラム、指導案、評価法などを学ぶ。

地元企業と連携し、 現実的課題と深く向き合う

2つめの特徴は、実際に地域の課題に取り組み専門教育科目「課題探求プロジェクト」を、1年次から設けていることだ(図2)。これは、学生が県内の企業や自治体などに出向いて、様々な課題を知り、調査し、課題解決の一端を提案するという実践的な授業となる。

「座学で学んだことを活用する場として、そして、学年が上がるにつれて到達目標も高くなるよう、プロジェクト学習を設定しています。課題の探求と問題解決を通して、意思決定力や批判的な思考を育むとともに、リアルな社会を理解し、自分の進路を考える機会にすることをねらいとしています」(寺岡副学長)

1年次3クオーターの「課題探求プロジェクト基礎A」を例に、授業内容を見ていこう。この科目では、鉄道、観光業、製造業などのテーマごとに学生5人で1チームとなり、1チーム2つの企業・団体を訪問し、社員・職員にインタビューを行う。遠藤さんは、人事がテーマのチームとなり、

図2 「課題探求プロジェクト」の概要

年次	科目名	授業概要
4年次	前期 課題探求プロジェクトⅢC	グローバルアプローチ(3年次後期に留学を終えた学生が対象): 留学中に各自の設定した探求課題を踏まえて、外国人との共生や地域資源の海外発信を地元コミュニティーや自治体の観光関連部に提案する。
	後期 課題探求プロジェクトⅢB	地域創生アプローチ: 前期の取り組みを踏まえて、各チームが調査や企画の実施、発案を行う。連携先の企業や自治体、住民とともにデータの分析、改善プランの検討などを行い、案をまとめて報告し、報告書を作成する。 グローバルアプローチ(3年次前期に留学を終えた学生が対象): 留学中に各自の設定した探求課題を踏まえて、外国人との共生や地域資源の海外発信を地元コミュニティーや自治体の観光関連部に提案する。
3年次	前期 課題探求プロジェクトⅢA	地域創生アプローチ: 連携先の企業や自治体などに課題解決の一助を提案するため、テーマごとにチームを組み、特定の課題について、必要な法規や情報、課題に関連する学問分野の文献学習、教員やゲストスピーカーのレクチャーから学び、予備調査や後期の調査・分析・発案の内容、日程を企画する。 グローバルアプローチ: 自治体の外国人担当部局や商工観光関連部局と連携し、具体的な事業や観光商品開発などについて改善提案を行う。
	後期 課題探求プロジェクトⅡ	地域創生アプローチ: 各自の問題意識の下に、具体的な課題や企業・自治体の特定の課題について、継続的な調査の実施や就業体験、イベント・活動への参加を通じた体験的な学習を行う。 グローバルアプローチ: 異文化交流やダイバーシティ(*1)に関連して自治体の生涯学習ないし商工観光などの部局や関係団体の実施するイベントや取り組みの企画・運営にチームで加わり、体験的な学習や調査を行う。
2年次	前期 課題探求プロジェクトⅠ	地域創生アプローチ: 地域社会や企業などで発生する問題について、教員の講義やゲストスピーカーの説明を受けて、グループディスカッションを行う。さらに、現場での活動体験や聞き取り調査をし、それらをまとめて報告する。 グローバルアプローチ: 異文化理解教育のあり方や地域の中での外国人問題、県内企業のグローバル展開などをテーマに、学校現場や自治体等への訪問・視察、イベント参加を行う。
	後期 課題探求プロジェクト基礎Ⅱ	タイのグローバル人材育成を日本のそれと比較し、分析を行う。また、タイでの短期研修プログラムを通して、タイのグローバル人材育成の具体的な取り組みを体験し、学習する。
1年次	4クオーター 課題探求プロジェクト基礎B	他国・他文化における読み書きの慣習を学び、自らも様々な様式の読み書きを行う。その上で、3~4人のチームで、地域の小・中学生とともに物語の読み、語り、創作を日本語と英語で行う。英語の読み書き能力全般を向上させることを目的とした科目。
	3クオーター 課題探求プロジェクト基礎A	少人数のチームごとに、地域で生じている様々な課題を抱える現場や、企業・自治体等の具体的な現場を複数訪問。各チームは訪問先の事前調査、ヒアリング設計、事後分析を行い、報告会で学生自身の気づきや課題を洗い出す。

*1 多様性などの意味をもつ英語。

*同大学の資料を基に編集部で作成

1社目の訪問先は建設資材などの販売を行う企業だった。質問内容は、メンバーで分担して訪問先の業務内容や人事の仕事内容などについて調べてから、案を出し合い決めた。

「訪問先やテーマは決まっています。だが、人事の仕事内容はあまり知らず、また、インターネットで調べて分かるようなことは聞けないため、質問内容を具体化するの大変だし

た。でも、自分が就職活動をする際に、どのような観点で見られるのかを知ることができましたし、チームのメンバーから自分にはない視点での質問が出てきて、勉強になりました」

訪問先は全12チームですべて異なります。24社・団体が協力した。同大学では、1992年に地域共同研究センター(現・産学官連携本部)を、95年には県内企業による協力を設立し、

工学部を中心に産学官連携を進めている。協力会の会員企業は、200社以上(16年11月現在)。同学部は、こうした大学と企業、そして自治体等との連携実績を基に、30以上の企業・自治体等の協力を取りつけた。

「協力企業・自治体による協議会を結成し、学部運営に意見をいただくなど、協働して教育を推進していく体制を築きました。地域から本学部



写真2 課題解決策を考えるためには、まず課題を客観的に分析し、問題がどこにあるのかを把握することが重要になる。そのためのリサーチ・リテラシーを身につけるため、「統計学入門」などの専門科目も配置した。

への期待を感じています」(伊藤教授)

**解決策を見いだすために
自然科学の基礎も学ぶ**

既にある学内の資源を有効に取り入れ、文理融合型のカリキュラムとしていくのも特徴だ。寺岡副学長は次のように説明する。

「現代の地域社会が抱える問題は複合的であり、自然科学系の基礎知識と方法の助けを借り、その解決を目指して複合的、総合的にアプローチすることが必要です。本学部が研究対象とする地域の課題という観点から見た、自然科学系の基礎知識とリテラシーを培うという目的で、自然科学の専門科目を配置しました」

専門教育の「総合科学科目」は、地域の課題に密接にかかわる「生活環境」「科学技術」「医療」の3分野とし、「科学技術」は工学部、「医療」は医学部の専門教育科目から履修科目を設定した。また、課題解決に必須となるリサーチ・リテラシーも専門科目を配置した。

「ただ地域に飛び込むのではなく、

社会にどう貢献していくかを模索する場に

同学部の教育活動は始まったばかりだが、寺岡副学長は確かな手応えを感じている。初年度の入試では、出願者の半数以上が県外出身者だった。実際の入学生は2対1で県内出身の方が比率が高いが、県外出身の学生も多くいることで、学部内にはさらに活気がもたらされている。

「学部1期生ということもあり、どの学生も意識を高く持っています。特に県外出身の学生は、どの活動も率先して取り組んでいます。また、オープンキャンパスや高校教師対象の進学説明会では、他学部の3・4年生に交じって、本学部の1年生が堂々

地域が抱える課題を客観的に捉えられなければ、有効な解決策は見いだせません。論理的な裏づけがなければ、どんなによい解決策でも相手を納得させるのは難しいでしょう。社会調査の手法や統計学などを学ぶ科目を1・2年次に配置し、『課題探求プロジェクト』で実践できるようにしています」(伊藤教授)

とプレゼンテーションをしています。随時開催しているキャンパスツアーでは、国際地域学部の学生に案内された高校生や保護者からの評判が高く、学内からも本学部生への期待の声を聞いています」(寺岡副学長)

学生の積極的な姿勢は、学びにも表れている。遠藤さんは、大学の短期海外研修プログラムを利用して、1年生の夏休みに3週間、マレーシアのマラヤ大学での語学研修に参加した。毎日3時間の英語の授業のほかに、民族音楽や舞踊なども学び、最終日のセレモニーで発表した。

「現地の大学生がバディとしてつい

てくれて、観光案内もしてくれたので、ずっと英語を話していました。前期の授業でみっちり鍛えられていたので、英語で楽しくコミュニケーションできました」(遠藤さん)

英語を徹底的に学び、課題解決型学習を積んでいる学生は、将来をどのように見据えているのだろうか。

「発展途上国の教育に関心があり、それにかかわる仕事に就きたいと考えています。青年海外協力隊も視野に入れています」(遠藤さん)

「将来の職業は具体的に決まっていますが、この学部で英語を話せるようになり、経済や政治などの知識も身につけて、世界中、場所を問わずに働けるようになりたいと考えています」(相原さん)

そのような意欲に応え続ける学部でありたいと、伊藤教授は語る。

「一生取り組みたいテーマやその方向性を見つける場として、本学部は最適です。地域に出て、実際の課題に向き合い、それに真剣に取り組む人に出会い、たくさんさんの刺激を受けることでしょう。どのように社会に貢献していくか、自分の軸を模索できる学部でありたいと思います」